



新門脇地区から石巻港方面を見据える小林氏と UR の大山

人と人とのつながり、命の循環を見つめて。 石巻に新しい「まち」が生まれる。

音楽プロデューサーの小林武史氏は、非営利組織「ap bank」代表として、東日本大震災の復興支援にも深く関わってきた。その小林氏が、UR都市機構の取り組む復興の現場をたどるシリーズ。第1回は石巻市新門脇地区の「いま」と「これから」を訪ねた。

人と人をつなぐ、 草の根的な復興支援

「あの向こうが石巻港ですね。そう思うと、改めてこの地区の被害がどれほど大きかったか想像ができます」

そう語ると、小林武史氏はしばし辺りの風景に目を凝らした。音楽プロデューサーとして活躍し、近年では環境プロジェクトへの融資などを行う非営利組織「ap bank」の活動で知られる小林氏。2011年の東日本大震災では、地震発生の直後から被災地へ向かい、現地状況を確認しながら、石巻をはじめとする宮城県と岩手県で炊き出しなどの復興支援に携わってきた。

その一つ「右腕派遣プログラム」は、復興に関わるプロジェクトの「右腕」として働く人材を、それぞれの現場へ派遣する試み。たとえば被災した牡鹿半島の蛤浜で、地元出身のオーナーが開く「café

はまぐり堂」では、オープンに向けた古民家の補修やボランティアの受け入れなど、「右腕」が担っている役割は大きい。

その他、ap bank では、現地のニーズに応じてボランティアを派遣する「東北ボランティアプログラム」や、避難所に本を送る「贈る図書館」、被災地の小・中・高



小林氏は今回、「右腕派遣プログラム」で支援する「café はまぐり堂」も訪問。オーナーの亀山氏（上右）、派遣しているスタッフを激励した

校に音楽を届ける「歌の炊き出し」といった、さまざまな活動を行ってきている。

「ぼくらの活動は、人と人をつなぐ、いわば草の根的なアクションです。その一方で、まちを丸ごとつくり直すようなスケールの大きな事業も、地域の復興には大切なことだろうと考えていました」

長い時間と地道な取り組みで、 安全なまちと住まいを築く

そんな思いを持って小林氏が訪れたのは、石巻市の新門脇地区。UR都市機構が



小林武史

こばやし たけし

1959年山形県新庄市生まれ。日本を代表する音楽プロデューサーとして、サザンオールスターズ、大貫妙子、Mr.Children など多くのアーティストを手がける。2003年、桜井和寿、坂本龍一らとともに非営利組織「ap bank」を設立、代表理事を務める。

手がける復興事業の現場の一つだ。案内にあたったUR都市機構・石巻復興支援事務所長の大山雄二郎は語る。

「この地区は、旧北上川の右岸から日和山の南側にかけて広がる住宅市街地でした。しかし津波で大半の家屋が流され、都市機能を失うほどの被害を受けました」

URが石巻市から委託を受けた事業には、区画整理を進める上での地権者への説明や交渉も含まれる。特に今年5月から6月にかけては、約200名におよぶ地権者すべてと個別に面談。

「被災前にお持ちだった土地が、どの区画に変更になるか、宅地の完成時期や造成の高さも具体的にお示しし、地権者の土地活用の意向などを伺いながら、配置を決定していきました」

そうした地道な作業に加え、地中に埋まった建物基礎を撤去するなどの土地整備、さらには今後、市街地を津波から守る役割を持つ高盛土道路の建設も始まるという大山の説明に、「命を守るまち、安心して暮らせる場所をつくるには、長い時間と地道な取り組みが必要なのだとわかります」と小林氏も大きくうなずく。

命のつながりを大切に ローカルな魅力を発信

「これまでの活動で環境や食について考え、また今回、東北の復興に関わるなか

で危ぶんでいるのは、経済の合理性を優先させるあまり、大切なものを見失っていないかということでした。それをぼくは『命の循環』だと思っています」

そう語る小林氏は2016年に、石巻市を中心とした「東北・牡鹿芸術祭」の開催を考えている。震災の後にも地域に根ざす暮らしがあり、繰り返す命の営みがある。「そのことを実際に東北へ来て確かめてほしい」という地元の声を聞き、新潟県で開催された「大地の芸術祭」のような「地方型芸術祭」という仕組みで何かできないかと考えたのがきっかけだ。

芸術祭には、多くの人を運ぶ足が必要になる。そのためには、2015年6月までに仙台～石巻間で全線再開する JR 仙石線が不可欠だ。津波により沿岸部に大きな被害を受けた仙石線は、線路と駅舎を500m内の陸の高台に移し、東松島市の野蒜北部丘陵地区へと移設する工事が進んでいる。

「そのための造成工事も、現地のまちづくりを担当するURの東松島復興支援事務所が進めたもので、今年6月にはJRへの土地引き渡しも完了しています」というURの説明に、「交通はまさに人と人、地

上/緑深い高台の日和山公園から新門脇地区、復興祈念公園予定地を望む。その向こうには石巻湾の景色が広がる
下/住宅建設開始に向けて準備の進む現場にて

域の命をつなぐ大切なライフラインですからね」と小林氏も答える。

新門脇地区も、これから本格的な工事が始まり、3年後には戸建と集合住宅を合わせて約400戸、約1000人が暮らす新しいまちが誕生する予定だ。

「住民の皆さんがもとの暮らしを取り戻すには、まだ時間がかかります。そういうとき芸術祭のような催しが開かれ、交流人口が増えることは、まちが新しく生まれる起爆剤となり、素晴らしいタイミングだと思います」と大山も期待を寄せる。

さまざまな人の力、時の積み重ねにより新しい一歩を踏み出す東北。その歩みを今後もさまざまな視点から見つめていきたいと語る小林氏は、URの取り組む「復興現場のいま」を今後も歩いていく。

【石巻市新門脇地区の復興計画】

UR都市機構は、半世紀にわたるまちづくり、住まいづくりの実績と、阪神・淡路大震災および新潟県中越沖地震などの復興まちづくりの実績をもとに、東日本大震災で被災した東北3県の22地方公共団体で、復興支援事業を行っている。

新門脇地区は、石巻市門脇町、南浜町の一部約23.7ha。石巻市の事業要請にもとづき、土地区画整理事業によって宅地を造成し、新たな市街地の形成を目指す。また津波や高潮に対し、「多重防御」のまちづくりを目的として、地区南側には2つ目の堤防の役割を果たす高盛土道路

「南光門脇線」の建設を進めている。総事業費：約81億円。事業期間：平成25年度～平成30年度。



新門脇地区の完成イメージ図

街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
http://www.ur-net.go.jp/saigai/